
死神の斧

3 L

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の斧

【Nコード】

N0588BA

【作者名】

3L

【あらすじ】

少年は召され、人とは理の異なる存在へと変わる。

一人の少年が命を失い、目覚めたところは死神の住処だった！？自らの姿と生活を手に入れるため少年は死神の仕事を手伝うことに。

*のんびり更新していきたいと思います

プロローグ

どうしてこうなった。

電気はつく。水道も流れている。そんな料金踏み倒せばよかった。これはひとえにボクの危機管理能力が低かったからに違いない。

ひうつ・・・ひうつ・・・

しゃっくりが始まる。

食べ物を求めて息を、つばを飲み込みつづけてついにしゃっくりが始まったのだろうか。

ただでさえ体力がなくなっているのにしゃっくりなんて無駄な肺の痙攣で体力消耗したくない。

ひうつ・・・ひうつ・・・

ああ、高校受験なんてしなければ良かった。定時制の高校にすればよかった。バイトはじめたらその月の15日に給料がはいるだなんてバカな勘違いしていなければよかった。

おなかが減りすぎて痛かったおなかはもうずっと前から感覚がない。冷たい床ももう感じない。

こんな飽食の日本で餓死をするなんて1年前には考えもしなかった。

両親が11月に交通事故でなくなり、その賠償金やら、両親の・・・ごめんなさい葬式できなかつた。お墓にいれてもらうお金でほぼ

すっからかんになって、高校受験の受験料で生活資金が枯渇して、未成年で保証人がアメリカの絶縁状態のおじだけという状況のおかげでクレジットでお金借りることも出来なくて、そのくせ残ったかなお金で電気ガス水道の料金を踏み倒す勇気がなくて、2ヶ月近く何も食べないことなるだなんて思いもしなかった。

雑草を食べようとおもったときにはもう遅くて胃液すら出すことが出来ずに吐き出していた。

っ・・・・・・・・っ・・・・・・・・

ぼやけていた視界が少しずつ黒くそまっっていく。

じめん。父さん、母さん。今からそっちへいくみたいだ。

プロローグ（後書き）

実際には餓死する前には幻覚見たりとかいろいろもつとあるみたいですね。

たった3ヶ月で餓死っていうも現実的にはたぶんないと思います。

まあ、正直トラック事故トリップでも理由不明トリップでもよかつたのはよかつたんですけどね

No.1:目覚め

ぺちぺち、ゆさゆさ・・・

ボクは頬を叩かれ、肩をゆすられる。

「おい。おきろー」

女の子だろうか気の抜けた、やる気のなさそうな声が耳に侵入してくる。

「んんっ・・・あれ？寝てた？」

ボクは反射的に言葉を返す。

寝起きの倦怠感が・・・って餓死寸前だったじゃないかボクは。ぼんやりとした視界で声の主を探す。すると真っ白な背景に奥は机か、と茶色の物体が見下ろしているのがわかる。うん。よく見えない。

「寝てた？ってのんきだなーお前。餓死寸前だっただろー？」

腕でごしごしと目をこすり、あらためて声の主を見あげてみる。

真っ黒な黒髪に紫のきれいな瞳の女の子がボクを見下ろしていた。服装はタイトな黒いスーツに身を包み、その上に茶色の地面までつくゆるいカーディガンともコートとも取れるものを着込んでいる。年はボクより2-3年上の18ぐらいに見える。この人はいったい誰だろうか？弁護士・・・にしては若すぎるよね

「えと、おはようっ？」

とりあえず、ボクは挨拶を試してみた。

「あー・・・おはようさん。」

彼女はしゃがんでボクの目線まで目線をおろし、ボクになにかごそごそとやる。

その間ボクはというと彼女の顔がどアップになるわけで、なんかどぎまぎしてしまう。

ちらちらと目線を右へ左へとずらしつつ彼女の顔を盗み見る。

細くてそれでいてしっかりとした眉は額の中心により、眉間しわを作り、まつげの長いクリツとしたはずの瞳は半眼で、ぷっくりとしたピンク色の唇は不満そうに下唇を突き出していた。鼻梁の通った小さな鼻とかパーツがいいだけにその表情がなんかすごく残念だ。

「とりあえず、立てる?」

黒髪の彼女がボクへと手を差し出す。と、今気付いたけど彼女のコート、フードもついてるのか。ということはこれはローブって言うのかな。いや、まあ、どうでもいいんだけどさ。

「ありがとう。」

ボクは彼女の手を掴み、足腰に力を入れて立ち上がる。にしても、ボクこんなに声質高かったかな?一週間以上何もしゃべって無かったからこんな声になったのかな?何も食べてないし。でも・・・ああ、ふらふらする。体が重いような軽いようななんだろう?

「おっと・・・」

腕がボクの腰に添えられ何とか体勢を保つ。ってこの人、結構背

高いな。ボク一応162あったのにそれよりも10センチぐらい高いぞこの人。でもそうすると体のバランスとかおかしくな・・・？

「あーこんなとこで起こさないで正直にベッドに運んどけば良かった。あ、でもここだと・・・あーめんどくさいっ！」

彼女はなんかブツブツと自己完結。ちょっと申し訳ない気持ちになる。

ボクは彼女に支えられ執務用の椅子っぱいのに運ばれ、腰掛ける。ふかふかしてて後ろに体重かけると30度ぐらい倒れる値段の高そうなやつだ。

「とりあえず、なにもしないでちょっと待ってなー。」

そういうと彼女はそそくさと部屋から出て行ってしまった。

なんか妙だ。と思う。ついさっきまで餓死寸前だったのに体少しふらついたがもう頭はだいぶはつきりしてきている。周りが真っ白で病院かと思えば窓のない、閉鎖的な執務室らしき場所。この部屋の出入り口はつるつとした灰色の薄いふくらみが未来的で、執務室にはあってもよさそうな絵画がどこか壁にかかっているということもない。アパートの中からこんなところに来るまでの納得できるストーリーが頭の中でうまく描けない。記憶をどこかに置き忘れてきたのだろうか。

ボクはとりあえず椅子を引き、中学の休み時間のように机にべたっと体を倒し、頭も机におろしてしまう。なんだかこの机ちょっと高くてあんまり楽な体勢にならない。中学の時はおなかの少し上から机に当たる感じだったのに今だと胸のちょっと上が乗る程度だ。

ボクは椅子をちょっと下げ、こんどは頭だけ机に乗るようになる。ちよっと楽になった。髪がはらりと目にかかり、わずかに視界をふ

さぐ。白髪。指を、腕を見てみると折れそうに細く、血が通っていないみたいに真っ白。これじゃあ本当に健康不良児だ。まあ、当然なんだけど。

ボクはため息をつくとなんのけなしに机の本を眺めてみる。背表紙にはLOWや法律の文字。六法全書なんかもある。あんなに若いのに国際弁護士かなんかなのだろう。でも、それならボクがここにいる理由もなんとなく理解できる。叔父さんがたぶん助けに来てくれたんだ。迷惑かけるのは忍びないけど正直助かった。

そうやってボクは今の状況に一応の決着をつける。そしたら今度はなんだか眠たくなってきた。ちょっと安心したからかな？ボクはあくびをかみ殺し、目を閉じる。いまはすこしでもいいからまどろんでいたいとおもっ。

プシュー

音がしてボクはまぶたを開け、体勢を戻す。見ると、上下に開いた自動ドアからさっきのお姉さんがポットなんか乗ったトレイを持ってこっちに来るところだった。

「ほら、寝起きのとこ悪いけどとりあえずこれ飲んで。目が覚めるから。」

そういつて彼女はカップに注いだ紅茶を注ぎ、ボクへと差し出す。爽やかなレモンの香りが鼻腔をくすぐり、頭をより覚醒へとみちびく。紅茶を口へつけてみると紅茶そのものの甘さを邪魔せずに蜂蜜の甘さとレモンの酸味が混ざり合い柔らかでそれでいてさっぱりとした味わいがひろがった。

「おいしい。」

そんな言葉が自然に出る。紅茶なんてろくに飲んだことなかったけれどこれはすごくおいしい。

「それはよかった。」

黒髪の彼女から笑みがこぼれていた。さっきの不満そうな表情と比べるとやっぱり笑顔のほうがいい。

「でも、熱くなかった？私は猫舌でさ。ちょいと熱かった。」
彼女はちよっぴり不安そうな顔をする。

「いえ、ぜんぜん。むしろちよっぴりよかったです。あたまもすつきりしましたし、あ、でも声、元に戻らないですね。」

熱すぎず、ぬるすぎず、ホットドリンクとしてはちよっぴりいい温度だった。でもちよっぴりのどの調子は戻らないんだよね。朝起きた後とか少し声が変わるときがあるけどそういうのも結構飲み物、とくにあったかい飲み物を飲み終わるとなおったりするのに・・・

「こえ？・・・ああ、妙におとなしいと思ったらまだ気がついてなかったんだ？」

彼女は呆れ顔で言う。何か重要なものを見落としてる気がする。

「気がついて？何がですか？」
急に動悸が激しくなる。たぶんボクはその理由に気が付き始めている。

「いい？あんまり驚くなよ？騒ぐなよ？めんどくさいから。」
彼女はまるで脅すように言う。

ボクはこくりと息をのみ、胸元に手を当てる。ああ、そういうこ

とかと脳が納得しかけてくるのを無理やり振り払う。

彼女は大きな宝石ついたごてごてした指輪を床にかざす。

キラキラと光が舞い上がり、まるで初めからそこにあつたのかのようにはスウッと巨大な鏡が現れる。めり込んだ天井から破片がぼろぼろと落下し、机に散らばる。

そこに写っていたのは白く長い髪に紫色の目を持つ女の子だった。

No.2:確認(前書き)

説明パートです。説明が始まったらさらっと読み飛ばすくらいの気持ちで読むことをオススメします。正直、自分で読んでも文章がひどいです。

No. 2 : 確認

少女は驚きに目を見開き、顔がみるみる青ざめていく。

そうなんだろう。これは鏡。どこか違う場所の誰かを写し出すよ
うなものじゃない。少なくともボクはそのためにこの鏡が出された
わけじゃないことを知っている。

ボクは鏡の少女に向けて指を指す。鏡の少女は一瞬の間すらなく
ボクを指差す。ボクがボク自身の顔を指差すと少女も自身に指を指
す。少女は真っ黒なローブを身にまとっていた。襟元からは鎖骨が
のぞき、胸元も少し開いている。そういえばボク自身も黒いローブ
を着ていた。

ボクは大きいため息をつく。

「やっぱりこの子ってボクなんですか？」

ボクはいい加減あきらめる。ありとあらゆる状況がボクが鏡の少
女であると指し示す。

「そうだね。」

彼女はゆっくりと椅子に座るボクに近づき、頭をなでる。ボクは
なんだかかくすぐったくて身をよじる。鏡の中の少女も彼女に頭をな
でられ、身をよじっている。恥ずかしそうに顔を赤らめ、はにかん
だ笑顔が愛くるしい。

なんだか撫でられる感触に両親を思い出し、ほんの少し物悲しく
なる。

「えと、これってどういうことなんですか？」

彼女はボクの頭から手を離し、考えるようにあごへ手を添える。
「逆に聞いていい？どこまで覚えてる？」

どこまでって言われてもアパートの中で動けなくなっただけで気付いたら

「たぶん。餓死寸前のところだと思います。」

ボクは椅子を回転させ彼女のほうへと向ける。なんだかそわそわしてボクは椅子の上で体育座りをする。当然だ。たぶん今ボクは裸の上にローブを身にまとっているだけ。無防備っぽい感じがなんかやばい。

「そう。記憶の欠落とかは特になさそうだね。」
彼女はほっとした顔で言う。

彼女がいうならたぶんそうなんだろう。なんとなくだけどボクはこの人を信用してもいい人なんじゃないかと思う。

「なあ、いまって寒かったりする？先に服替えとく？」

彼女はどこからともなく？いや、さっきは気付かなかったけど机の横においてあった茶色のトランクを持ち上げ、机にのせる。

「えっと今はまだ恥ずかしいのもうちよつと落ち着いてからにしてもいいですか？」

裸にローブとかそれも確かに嫌なんだけど女性用の下着に身を包んだりってことを考えるとすぐぞわぞわする。自分が女の子になっちゃったんだって頭の中では理解してる。でもだからといってボクはその一歩をすぐに踏み出せるような割り切りのいい人間じゃない。

「まあ、そっか。でも、ホントに寒くなったらすぐに言いなよ。」

「はい。ありがとうございます。」
ボクは気を配ってくれる彼女に素直に感謝する。

「たぶんさ、一番知りたいたいのは何で女の子になったかかってことだと思っただけど私、説明下手だし、あとたぶん、デリカシーのない言い方もするけどそれでもいい？」
ボクは大きくうなずく。

「まずさ、ここにお前がいるのはもう死んだからだって言うのはわかる？」

彼女はなんの気もなしに言う。

「死んだ・・・」
死んだ。あの状態、状況からじゃそういうことも覚悟はしていたでも、事実として言われるとやっぱりちよっときつい。

「ごめん。こんな言い方しか出来なくて。」
彼女は申し訳なさそうにいう。たぶんここは何にしても前提になることなんだろう。だからそんな謝ったりしない欲しい。

「大丈夫です。わりと覚悟はしましたから。」
視界がふと、じんわりとにじむ。

「ちょっと鏡を見て欲しい。」
そういつて彼女はボクの座っている椅子の向きを変える。
ボクはローブに目をこすりつけ、顔を上げると鏡の中にはさっきとうって変わって今にも泣きそうな少女がいた。

「今の自分の瞳の色ってわかる？」

ボクの、少女の瞳は紫色だ。

「紫ですか？」

ボクは鏡に写る彼女を見やる。彼女の瞳も紫だったはずだ。

「そう。私の瞳も紫。」

鏡の中の彼女が見やすいようにと少女の近くによつていく。

「この瞳は死神の瞳なんだよ。」

「死神の瞳？」

急にわけのわからないことを言う。目を合わせたら死ぬとかそういうことなんだろうか？

鏡の少女が怪訝けげんそうな顔をする。

「いや、説明が悪かった。私もお前も見た目はただの人間だよな？でも、実際は死神って言うちょっと変わった存在なんだよ。その死神に共通する一番の特徴つてのが紫色の瞳つてわけ。」

彼女は頬をかき、あせつたように続ける。

「ボクが死神？」

なんか、わけのわからないことがまた増えてしまった。女の子になっただけでもわけがわからないのにおまけに死神だなんていうものにもなつてしまつていたらしい。

鏡に写る少女も彼女も死神なんて物騒な存在にはとてもじゃないが見えない。

「そう。一時的に色が落ちたりすることもあるけど基本的に死神はみんな紫色の瞳をしてる。あと、もう一つ死神には特徴があつて、死神は女性しか存在しない。」

ほんの少しだけボクの今ある状況が理解できた。

ボクがこういう状況におかれているすべての原因は死神になったことによるものだったらしい。

「じゃあ、ボクは死神をやめれば元の、男の姿に戻れるんですか？原因がわかっているなら原因を取り除いてしまえばいい。」

「そういうのはムリ。基本的に死んだ人間は輪廻りんね転生のために記憶も何もなくまっさらになるのが普通なんだ。いまはいわば寄り道している状態なんだよ。だから、死神をやめるって言うのはすべて捨てまっさらになるってこと。」

彼女は背中を壁に預け足と腕を組む。

幸か不幸か、死神になったおかげでボクは自分というものを失わずにすんだらしい。自分が消えてなくなるっていうのやっぱ怖いと思う。だから、たぶん幸せなことなんだと思う。でももし、死神にならなければ？たぶん、ボクは何も知らずにただ眠るようにまっさらになっていたはずだ。なら、それはそれでよかった気もするでも、今は違う。

死神になって、死んだ後どうなるかを知ってしまえばそれがたとえ女の子の姿だったとしてもボクは死神であることを受け入れざるをえない。でも、ボクが今の女の子の姿でいたらたぶん遅かれ早かれきつとボクがボクじゃなくなってしまう。見た目って言うのはそれだけ大きなアイデンティティーになる。だから、それは死ぬってことと同じなんじゃないかな。

「死神のまま、男になることは出来ないんですか？」

ボクはわらにもすがるような気持ちで聞いてみる。

「技術的には出来たけどさびん前に禁止された。」

彼女は下唇を噛み、悲しそうに、さびしそうに表情で言う。

「禁止された？」

何でだろう？ほかにもボクみたいな人はきつといたはずだ。

「そう。死神は本来的に人種みたいなものだから女しか存在しない。原因は死神が、陰と陽いんつてわかるか？そのうちの陰よゆうに属するからだつて言われてる。陰いんつて言うのは女のこと、陽よゆうつて言うのは男のこと。で、そこに無理やり力を加えて男の形に変えると死神の力の使えない体になってしまふ。」

死神の力がどういうものなのかわからないけれど、それぐらいだつたらとボクは思う。

「それぐらいなら別にかまわないんじゃないかっておもった？確かに同じようにそう思った奴も昔にはいた。ここはね、男はもちろん女も死神の力をほとんど使えないんだ。死神の力さえなければお前のことすらベッドに運べないやつばかりだ。」

彼女は袖をめくり白く細い腕を見せる。

「だから普段、死神の力を使えず憂ヤッラき目にあつてる男もここにるときだけは誰よりも優位に立てた。そういうこともあつて昔いろいろなことがあつた。もちろん、男じゃなくて女が悪いなんてこともしょっちゅうだつた。でも、その問題の中心には常に男の死神が存在した。だから、これは双方を守るためのルールなんだ。」

そういわれてしまうとボクは反論できない。ボクだけが何とかすればいい問題じゃないのなら問題は結構複雑だ。

「ボクは元の姿に戻ることをあきらめないといけないんでしょうか？」

「別にあきらめないでもいいんじゃないか？できないわけじゃない。ただのルールだ。元の、男の姿に戻りたいならルールを壊せる、無視できる立場になればいい。それだけだろ？」

ルールはルール。確かにそれはそうだけれど。

「それはそうですね……」

「どうせ死神としてここに残るのなら死神の仕事をしなさいといけない。それなら、目指してみても悪くないんじゃないか？何かの縁だ。私も少しぐらいは手伝うよ。」

やっぱり消えてしまうのは怖い。だからボクはもう死神としてここに残るのを決めていた。それなら確かに目指してみるのもいいかもしれない。

「ありがとうございます。じゃあ、ちょっとだけがんばってみることにします。」

自分ひとりじゃなく彼女も手伝ってくれるのなら少し心強い。

鏡に写るトランクが開く。

「じゃ、着替えたら私の上司のどこ行こっか？」

ボクは自分の格好をすっかり忘れていた。

ボクの体がぶるっと震える。

格好そっち抜けて話を聞いてたからか急に寒気を感じる。

「あ……はい」

No.2:確認(後書き)

すみません。時間かかりました。ただ説明するだけなら簡単ですが読み物としての体裁を取り繕いつつ説明させるってかなり難しいですね。納得できる出来になるまでなんども修正するはめになりました。といいつつこれも100点には程遠いですが・・・

とにかく次回からはもうちょっとペース上げられたらなと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0588ba/>

死神の斧

2012年1月4日08時47分発行